

授業間のつながりを作る授業科目の「補間」コンテンツ作成

長谷川 紀幸

横浜国立大学 工学部

はじめに

近年、大学教育改革が著しい中で各大学では授業改善の組織的な取り組みが実施されているが、大学教員はそれ以前からも担当する授業の内容が学生の身に付くように、力になるように心を砕き工夫を重ねてきている。一方、教員による授業の工夫は個々の教員の知見によってそれぞれ志向性や方向性も多様であるため、学生にとって教員の工夫が必ずしも理解につながらないことも生じており、それが大学教員にとっての悩みともなっている。

特に専門教科の分野において、知識の体系化に基づいた授業科目によってカリキュラムが設計されているが、実際に実施される授業では授業計画や授業の内容などは個々の教員に帰されていることが多く、教員間で授業内容や授業計画などの共有を図ることが難しくなっている。その結果、学生は授業科目と授業科目の間や個別の授業と授業の間で知識内容に隙間が生じてしまったり、同じ授業科目の授業と授業の間の関連性に気がつかないことにもなってしまうため、こうした隙間を埋めたり、授業どうしの関係性を意識することができるよう「補間」する学習教材が必要となる。

本研究では、教員が実施する授業を軸として、授業科目や個々の授業での学習が前後の授業や他の授業科目間との関係性を意識することが可能となるような教員の知見の多様性や授業の特長を活かす学習コンテンツの作成を「補間」コンテンツとして考案した。

授業と授業の間をつなぐ「補間」

「補間」とは、ここでは学生の学習において以下のことを目指したことを言う。

- (1)カリキュラムで体系化された個別の授業科目間で学習する「知識内容の隙間」を埋める
- (2)ある授業科目の個別の回の授業と授業、あるいは以前履修した授業科目の授業との間の関係性を意識する

大学でのカリキュラムでは、学科や課程・コー

スなどで卒業までに修得すべき知識体系像の下に授業科目が設定され、入学時から卒業時まで知識体系に沿った科目を履修することでカリキュラムに想定されている知識体系を修得することとなる。

しかし、カリキュラムで想定している知識体系の枠組みの中にある授業科目はシラバスなどにおいては前提条件であったり関連科目であったりすることで重なっているが、現実には授業として実施される際には授業で学習する知識の「隙間」が存在することもあり、こうした隙間を埋めることを「補間」と称する。

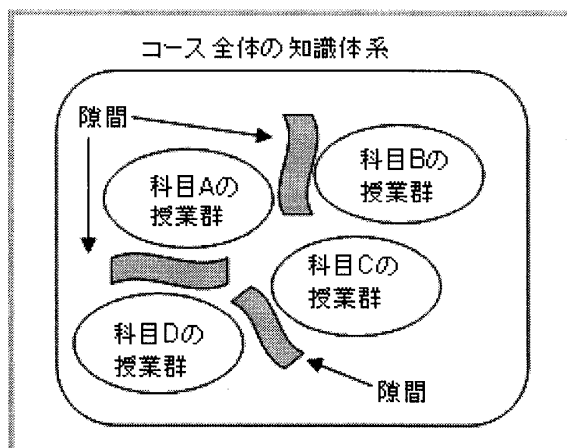


図1 授業科目間における知識内容の「隙間」

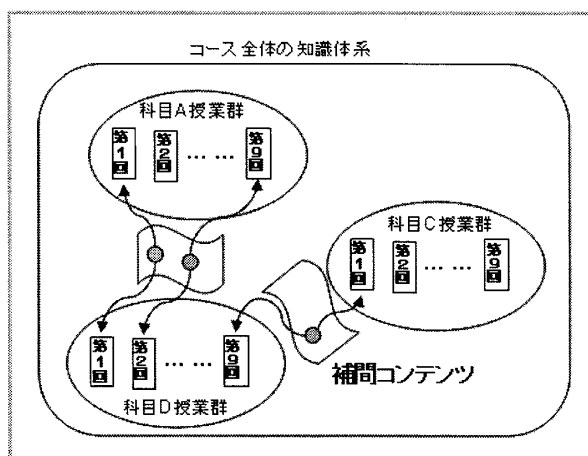


図2 授業科目間の関係性の「補間」

一方、授業の工夫や教授方法は個々の教員の知見によるため多様であるので、授業を実施する教員ごとの授業の志向性の違いなどによって現実の授業もまた多様なものとなる。こうした多様性は授業の特長と言えるものでありながらも、学生にとっては授業科目と授業科目の間の関連性を意識しづらいこととなりえる。このような場合において、関連性を持つある授業科目の授業における学習内容と他の授業科目の授業における学習内容の間の関連性を結びつけることも「補間」と称する。

以上のように授業科目の間の隙間を埋めることや授業科目と授業科目の関連性を意識することができるように学習するための学習コンテンツを「補間」コンテンツと呼ぶ。

「補間」コンテンツは現実の授業と授業を結びつけるためのものであるので、コンテンツの作成に当たっては授業科目を担当する教員の実際の授業内容に基づいて作成する。結び付けるそれぞれの授業科目を担当する教員の工夫や特長をコンテンツの中にも最大限活かすことが重要となる。

「補間」コンテンツの作成プロセス

「補間」コンテンツは現在とのところ以下のようなプロセスで作成される。

- (1) 教室に入ってその授業の工夫、特長を抽出
- (2) 他の授業科目の授業との関連性を抽出
- (3) ミニツペーパーなどにより学生の理解度や不十分な理解の点を収集
- (4) 実際の授業の特長に即した関連づけを行う学習用コンテンツの作成

「補間」コンテンツは実際の授業を軸としているので作成には、授業科目を担当している教員が実際に授業を行っている教室に入って授業を聞かせていただいて、その教員が授業で工夫している点や特長的な点を抽出してコンテンツへ取り込むことを検討する。また、他の関連する授業科目との関連性を実際に行われている授業の内容を基にして関連性を抽出する。さらにミニツペーパーなどによって実際に行われている授業に対して、学生がどのあたりに理解が不十分であるのか、どの程度理解しているのかななどの情報を収集して、「補間」すべき内容に盛り込むことを検討していくこととなる。

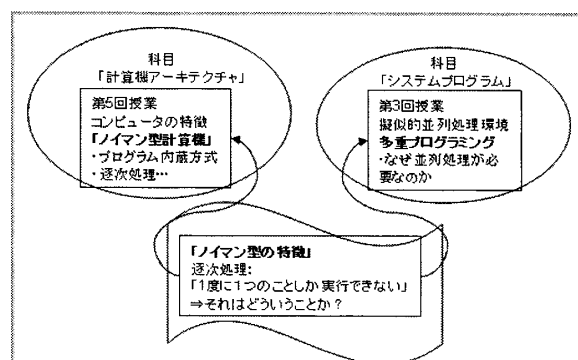


図3 「補間」コンテンツの例

授業のつながりから教員のつながりへ

こうした「補間」コンテンツの作成は学生に対してはカリキュラムの中の授業科目間のつながりを意識することができるように促し、同時に「補間」コンテンツが実際の授業を軸として作成されるため、他の授業を担当する教員にとって授業を行う上で有用な情報を共有することが期待できる。このような授業に関する情報の共有が情報の交流となり、教員と教員のつながりを作ることへと向かうコンテンツの作成を今後、検討していきたいと考える。授業と授業とのつながりを軸とした教員と教員のつながりがカリキュラムポリシーの策定などにより個々の教員が持つ知見と志向性の違いが多様性を保ちながら方向づけがされることにつながる可能性を今後、検討したい。

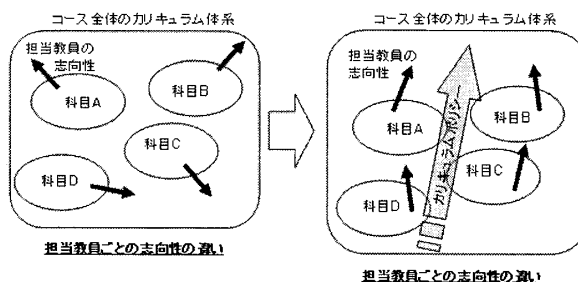


図4 カリキュラムポリシーによる方向付け

参考文献

寺崎昌男 (1999) 大学教育の創造. 東信堂, 東京
 沖裕貴 (2007) 観点別教育目標から考えるカリキュラム・ポリシーの構造. 立命館高等教育研究, 第7号, pp. 61-74
 山口大学 大学教育センター. 「カリキュラムマップ」